

平成 28 年 11 月 2 日

鹿児島銀行  
頭取  
上村 基宏様

一般社団法人 日本建築学会九州支部  
支部長 黒瀬重幸



旧第四百七十七銀行本店（鹿児島銀行別館）の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、貴社におかれましては鹿児島市金生町に建つ国の登録有形文化財である旧第四百七十七銀行本店（鹿児島銀行別館）を本年 11 月より解体し、平成 17 年 5 月に新本店ビルの着工を予定されていると新聞紙上で伺っております。

よくご存知のように、登録有形文化財旧第四百七十七銀行本店（鹿児島銀行別館）は、別紙にありますように、鹿児島出身の建築家で、曾禰達三のもとで学び、その後日本の衛生工学に多大な貢献をした齋藤久孝の代表作の一つです。その評価については日本建築学会の『日本近代建築総覧』（1980 年）『総覧日本の建築（9）九州沖縄』（1988 年）において記載されており、日本における価値ある建築の一つであります。「旧集成館機械工場（慶応元年 重文）」、「旧鹿児島紡績所技師館異人館（慶応 3 年 重文）」、「鹿児島県立博物館考古資料館（明治 16 年 登録文化財）」、「鹿児島港石造倉庫群（明治 39 年-）」に次ぐ鹿児島の歴史的な建築であるばかりか、旧山形屋デパートとも同一の設計者による建築で、鹿児島と非常に縁の深い建築です。この建物は第二次大戦中に甚大な被害を受けた鹿児島大空襲後も残り、当時の広馬場通りの賑わいを今に伝え、鹿児島の歴史を語る上でも、また鹿児島市中心部の景観を形成する上でもきわめて重要であります。

貴下におかれましては、この貴重な建築のもつ高い文化的価値と歴史的意義についてあらためてご理解いただき、最先端の建築技術を取り入れながら保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、当該建物が後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会九州支部としましては、この建物の保存活用に関して学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 28 年 10 月 22 日

## 旧第百四十七銀行本店（鹿児島銀行別館）についての見解

一般社団法人 日本建築学会九州支部  
建築歴史・意匠委員会委員長  
渡邊 道治

### 1) 建物の概要

旧第百四十七銀行本店（鹿児島銀行別館）は、大正 7 年に竣工した鹿児島市金生町に現存する建物である。建物は鉄筋コンクリート造で、設計は薩摩藩士本田親固の四男の齋藤久孝、施工は大林組である。

敷地は鹿児島市金生町の広馬場通りに面し、かつてより鹿児島の金融商業の中心地に位置する。建物は外装に北木石（岡山県笠岡市産出の花崗岩）を積んだ鉄筋コンクリート造で、防災・防火の安全対策を充分施し、地上 2 階建て、一部 3 階建てである。その平面は矩形で、建築面積は 503 m<sup>2</sup>、1 階にある営業室は 2 層の吹き抜けとなっている。2 階には頭取室や会議室等が配置され、一部 3 階となっている塔屋部分は居室として利用されている。外観の意匠はセセッション風の要素を一部取り入れたルネッサンス様式を基本としている。内部には大理石貼りの柱が立ち、客席の床版には英国製タイルモザイクを用いている。当時の「鹿児島新聞」は「市の偉観を加えた第百四十七銀行の新館、大理石や花崗岩の光に燦然と輝く美しい装飾」と報じている。平成 19 年には国の登録有形文化財に指定されている。

### 2) 地元出身設計者の作品としての価値

設計者の齋藤久孝は、明治 7 年 6 月 20 日に鹿児島市に生まれ、明治 29 年 3 月鹿児島県尋常師範学校を卒業、鹿児島市男子高等小学校で教鞭をとるが、明治 30 年 7 月東京工業学校附設工業教員養成所本科建築科に入学、明治 33 年 7 月に卒業した。この間に、齋藤久孝に名を改め、卒業後は、文部省、東京瓦斯会社、東京信託会社、東宮御造営局等に勤務し、明治 39 年に曾禰中條建築事務所が設立されたときに入所したと言われている。明治 42 年には、農商務省の囑託で日英博覧会をロンドンに視察し、閉会後の明治 43 年には欧米各国を視察した。帰国後、設計事務所を営み、旧山形屋デパート、この旧第百四十七銀行本店（鹿児島銀行別館）等を設計した。当時は京三商会を設立し水道衛生工事の設計施工も請負っていたが、同時に日本水道衛生工事株式会社の取締役もつとめていた。大正 12 年に日本水道衛生工事株式会社を辞して齋藤久孝事務所を起し、各地で水道工事の設計施工を行い、大正 15 年に逝去した。齋藤久孝事務所は昭和 26 年に斎久工業に社名変更し、現在も従業員約 500 人、全国に約 24 カ所の拠点を持つ給排水衛生工事の会社とし存続し、明治期に諸外国で見聞して久孝が必要と考えた給排水衛生工事を国内に展開、現在も超高層ビルから住宅まで広く工事を手がけている。このように当該建築は明治期に活躍した数少ない地元鹿児島出身の齋藤久孝が設計した作品であるが、彼の建築作品は少なく、旧第百四十七銀行本店（鹿児島銀行別館）は貴重な例である。

### 3) 建物の意匠が有する価値と意義

旧第四百七銀行本店（鹿児島銀行別館）の外観は新古典様式の流れをくむ歴史様式を基本とし、花崗岩（北木石）により、金融機関の信用性を表現した威厳ある作品である。外観の意匠は基壇部の上に2層にわたる突き抜ける大オーダーが配置され、その柱間には矩形の窓が2層となって整然と配置されている。中央部の玄関両脇に大オーダーによるイオニア式の独立円柱が1本ずつ立ち、中央部全体がやや前方へ突出することで中心軸を強調している。全体としてはルネッサンス様式をもとにした古典的様式の意匠であるが、窓周り等には当時最新のセセッション風の意匠要素が取り入れられている。曾禰中條建築事務所では、日本近代建築史に名をとどめる数々の鉄筋コンクリート造建築を手がけており、齋藤久孝はその鉄筋コンクリート造の技術を学び、鹿児島にいち早く最新の技術で旧山形屋と旧第四百七銀行本店（鹿児島銀行別館）をつくりあげたと推察される。特に外壁は石を型枠としてコンクリートを打設した堅牢な構法で、今では再現が不可能な外観である。

内部の吹抜部分は改変されているが、旧頭取室はほぼ竣工時のインテリアが残されており、貴重である。また、各所に残されている室内の木製建具枠、旧鹿児島県庁舎に似た木製上げ下げ窓、大理石の階段周りのデザイン、その他の仕上げ材も秀逸で、当時の職人の技術による精緻な意匠を今に伝えている。これらの仕上げ材等は貴重で価値が高だけでなく、鉄筋コンクリート造を用いた最初期の西鹿児島の建築として非常に意義深い。

### 4) 都市景観上の価値

鹿児島市金生町の広馬場通りは、旧第四百七銀行本店（鹿児島銀行別館）建設時の大正期において鹿児島の金融街の中心で、当初は、市電がこの鹿児島銀行別館前の広馬場通り側に計画されていたと言われている。しかし、市電が山形屋側を通り、現在の鹿児島銀行本店側がまちの中心となっていたが、現在も広馬場通りに沿い金融関係の建築が確認される。旧第四百七銀行本店（鹿児島銀行別館）のファサードは、この広馬場通りの歴史を今に伝える。この観点から、旧第四百七銀行本店（鹿児島銀行別館）のファサードは、鹿児島大空襲以前の鹿児島の都市景観の記憶を伝えるだけでなく、広馬場通りや名山堀につながる金生町の地域のまちなみの記憶を知ることのできる貴重な景観である。





旧第百四十七銀行本店（鹿児島銀行別館）

上：広馬場通り側の外観、最上部の外観写真では、同じ齋藤久孝設計の山形屋の一部が見える（後の増築部）、下は正面。右は、南側（中町通り）の外観の一部。





旧第百四十七銀行本店（鹿児島銀行別館）  
左：美しい北木石の外観。  
下左：広馬場通り側の外観。 下右：定礎。

